大正十年七月二十五日印刷發行　大正八年十二月十八日（第三種郵便物認可）

ミオヤのひかり

第貳卷　第九號

大ミオヤは慈悲の眼を子にそゝぎ
　子はナムブツと親を仰ぎつ
天と地は親と子とにてもちりきの
　はゞかりもなく心安さよ
南無と呼ぶ聲にアナタは眞に向ふ
　おもひあぐればありがたきかな
ありがたしげにありがたしありがたし
　慈悲のミオヤを仰ぐおもひは
大ミオヤの慈悲の面がけおもほへば
　醒け人るばかり樂しかりけり
しやばの苦もいまは苦しとおもほへじ
　ミオヤに永久になぐさまる身は
大ミオヤの慈悲の笑顔をおもほへば
　よろづのこともみなわすれけり

大悲のミオヤ

如來は一切衆生の御親である。ミオヤを眞實にミオヤと信ずるのが信仰に入る第一歩である。如來を眞實にミオヤと信ずる時自己は佛の子である。眞の佛子と自覺するのである。如來はミオヤにて自己が佛子と自覺する時は他のすべての人は悉く同胞である。すべての人が眞に同胞と信認する時はすべてに對しておのづから親切に成らざるを得ぬ。

如來光明を火の性に例ふ

如來の光明法界に周徧せば如何なる形相あり亦いかに認め得可きか。曰はく如來の光明は法界に周徧すれども見聞する事は出來ぬ。然れども實在することは否定できぬ。今例を以て明さん。例へば火大は法界に周徧すれども火性は目擊することはできぬ。火は薪炭の類に燃ゆる時は形相を以て見べきも純粋の火性のみは認むることはできぬ。如來の光明もまた然り。實に無限性なものなれども人の心意に感じて初めてすがたに顯るゝなり。

宇宙の獨尊と個體の中心

宗教は人の個體に自我なる中心有る如くに宇宙にも中心獨尊の存在を認めて之に個體の中心なる自我が大なる宇宙の中心獨尊に歸命信賴して永恒の安心を得る所にあり。個體の中心が益向上するに隨つて宇宙の中心の尊貴なることを認む。個體に靈性の尊貴なる性能が發揮せざれば宇宙の中心尊格を認むること能はず。故に宗教心を發達せしめんと欲せば先づ現在の肉の我は動物的我にして一心に宇宙の絶待的靈界の中心獨尊は威神無極最尊第一なるを信して無上の尊敬を以て常に禮拜し至誠深心に絶待尊者を歸依し念すること久しければ漸次に靈性が發揮する故に彌々大靈的尊格を信認して最尊こく感せらるゝ宗教心が發達す。宗教心顯示せざるものは宇宙の尊靈を認むるもまだ尊崇性が發達せざる故に客體の尊格を感知する能はざるなり。例せば動物には高等なる靈性が全く發達せざる故に如何なるものに對しても尊敬心が感じられぬ。人類は知識其他の感情意志等が發達しても尊崇性が發達せぬ者は絶待尊格に對して尊敬の念が起らぬ。彼には高等なる宗教心が缺げて居る故に動物的である。動物の頭腦には高尚なる宗教性が缺げて居る故に最尊靈者に對する尊敬の念はない。自己の尊崇性が高等に發達すればする程絶待尊に對して尊敬の念が深い。故に尊崇性の發達せるものは人格も最高等である。

日光と金剛石

大陽が平等に照すに此光を反映する鑛物中高等なる鑛物程太陽の光り能く反映す。麁澁なる鑛物は反射の度が少ない。鑛物の緻密なる性質のものほど

反射の度が強い。金剛石や水晶杯は日光が強く反射す。日光と性質が近き故である。宗教的尊崇性の強き人は寶石の如くに如來の日光が著しく反映す。古來宗教的偉人は金剛石の能く磨ける如くに靈性に彌陀の光明反映して釋尊の如く輝くなり。

法然上人に反映する如來の光明

靈性の金剛石は本來具有す其量に於いては大小あらん。金剛石靈性具有すれども〻を琢磨するに非されは其の靈性を發揮するに至らず。法然上人は常恒不斷に念佛して彌陀の大靈と自己の靈性とが念々にすれつもつれつ一心金剛の如くに堅固にして如何なる事にも屈せず撓まず念佛して彌陀に磨かれたる故に信心の金剛石の靈性能く發揮して最高等なる宗教心が成就せり。故に法然上人の寶石には常に彌陀の光明が反射しつゝあり。例へは寶石に日光が反射する如くなり。法然上人の靈的偉大なる所以は彌陀の光明に反照せられたる處にあり。されば法然上人は肉體は人間なれども其心靈は即ち彌陀の光明に靈化せられたる分身の彌陀である。されば時人が形を見れは法然房實を申せは彌陀如來と敬はれしもまつたく是れ彌陀の光明に映じたる法然上人故である。若し法然上人の頭腦より彌陀の光明を全く除き去らは殘る所は只人間の法然上人のみ。靈界の偉人としての法然上人は全く彌陀に充滿せる人格のみ。恁の如く人格の光輝を放つは常恒不斷に念佛して彌陀の光明に磨かれたる結果に外ならず。

人々皆悉く佛性あり。一心に念佛して金剛の靈性磨く時は彌陀の光明反映して法然上人の如くにならん。たとへ材の大小はありとも雖、念佛して能く磨く時は必ず彌陀の日光反映せん。

心は西にうつ蟬の

此の頃の蟬の鳴く聲を聞くにつけても自づと思ひ出づるは法然上人の

あみだぶと心は西に空蟬の、もぬけ果てたる聲ぞ涼しき

の道詠にて、何とも懷しく感ぜらる。彼の蟬はもぬけ骸よりぬけ出てゝ中實はいかにもきよく潔よく聲を涼やかに歌うて居る。私共も一心に念佛する時は此身はむくろの夫と同しやうに成りて神は彌陀尊の中にぬけ出てゝ我を離れてあみだが我か我があみだかとまでに成りて稱ふる時は心はいかに涼やかに其心のいかにもすがゝしさが自づと聲にあらはれてすゝしき音すなり。それとも兎にかく口には御名を唱へても心はよそ事にのみ構ひてあらばそれは中身のなきむくろにて、否たゞにむくろのみにあらでくさ〻の雜念妄想のみに耽りて居たらば唯だ口を費すのみ。されば聖法然上人が念佛してミダに深くほれ〻と想ひ込みたる心の内こそゆかしけれ。實に其あみだ佛に神を憑したる上人の心は宛からみだに異らず。されば時の人々が形を見れは法然房實はあみだ如來とひとへに歎美したるも理りなり。

彌陀尊は光明普ねく平等に照り渡りてまします。こなたが其光明に接せんが爲にミダ尊に眞正面になりて心をミダ尊に致す時はアナタの光明はこなたの頭上より全身に入り來りてこなたの心がいつしかアナタの心と同じやうに化しぬるを疑ふことなかれ。

世には眞のミオヤの聖名をだに知らで空しく人生を闇の中に葬り去る人こそは實に憐れにこそ。併し乍ら恁かる人とても同胞たることは異らず願くは世のミオヤを離れたる同胞の爲めに一掬の涙を注ぎてミオヤの聖意を御知らせ申さばや。また世は日々幾千萬遍となく稱名し乍らも心には毫もミオヤを慕はしくもまた懷しくも思はで稱名は唯だ死後の冥福を祈る呪文のやうな族も少からぬ。同く同情に耐へぬ。

南無あみだ佛と御名よぶ眞正面に彌陀世尊は現に在ますなり。若し彌陀世尊はましまさぬに御名を呼び奉るは無意義の事にて、實に彌陀世尊なる絶待人格在ます信念によりてこそ始めて活ける信仰とはなるなり。

心本尊と申すことは吾等が心中に何時も離るゝことなき尊き活ける本尊を

おする中置く事なり。例へは大殿の中臺に御尊像を安置する如くに私共の頭の中臺に彌陀尊を安置して常に御本尊の威神と慈悲の光明に照され邪と悪とを捨て正と善とに就く御みちびきにあづかることなり。我らが心本尊とは吾曹が面前に如來は萬德圓滿なる絶待人格として眞正面に在まして圓かに照し玉ふ事なり。此信念の前にはいかに我曹が如き淺間敷ものも自づと清く高く靈に有り難き心と成る。威神の光明赫々として我らが頭上を照し玉ふを想ひ奉れば自づと私共は歸命頂禮の心が起きて何とも尊く感するなり。また彌陀尊の慈悲に充しめ玉ふ御すがたを想ひ奉れば何とも云はれぬ御懷しさとかたじけなさを感ぜざるを得ぬ。

拍子の音を聞け

禪の公案に隻手の音を聞と云ふあり。禪は形式的の悟道なれば自己の先天的の自性を開き即ち無聲の音を聞くに無聲の聲を以て自性を見るの手段とす。禪には宗教的客體の神を立てず。自己の本來の自性顯れ來る處に見性成佛す。今念佛門には其れと反對に我等が信仰の客體に阿彌陀佛を本尊として之に歸命信順して其双方の間に最も完全なる親密なる關係即ち兩方の合致した處に初めて宗教心が成立つ。之を衆生心水淨む時は佛日の影中に宿る。月は天に照して影水に映ず。月如何に皎々たるも水無き時は影を現はし難く、また水は滿つるも月なければ反映せず。衆生の信心と如來の恩寵の和合する處に感應同交し、此双方の關係は實に親密なるを要す。

如來の大慈悲心に衆生心の和合する處に感應同交初めて眞の宗教は成立つ。而して此双方の關係は恰も兩手の相拍手の處に柏手の音は聞ゆる如し。故に今は自心が彌陀に合して感應同交の妙音を聞くことを得て始めて眞實の信仰は得たるものとす。唯だ此の感應同交を言語の上にのみ會する如きはいまだ眞の拍子の音を聞くと云ふに足らず。須らく三昧發得して眞の柏手の妙音を確と聞き、また彌陀の答を聞くべし。

皮殼

我等はミオヤの子たると共に人の子である。人の子たる我等には染汚と迷妄と罪惡と苦惱との皮殼が強く〳〵く結ひ付いて居る。是が爲めに動もすれは自己を暗黑に引込まれて惡道に陷れんとして居る。佛子としての聖き心は微にして劫々顯れ難い。ミオヤの恩寵を被り光明に靈化せられて疾く光明の下に生活し得るやうに專らミオヤの恩寵を仰き慈光に導れん事を期すべきである。

御惠みの熱さ

此の頃の熱さいかに感じなされ候や。私ども衆生が一ヶ年のいのちをつなぐべき、いのちのね(稻)を養うて能き稔をなさんとの準備としての、あつき御惠みの熱さに候。之の熱さがつよきは強きほど、大ミオヤの御慈悲の深きにこそ。若しも此の熱さがなければ私どもの命をつなぐべき稻の豐稔は得て望むべからず候されば熱さのつよきを有りがたく感せられ申候。

誌料一部前金五錢、郵稅五厘、一ヶ年前金六拾錢
集金郵便料六錢
(正十年七月二十五日印刷發行(毎月一回發行)
編輯兼發行人　岩品誠信　東京京橋區本八丁堀一ノ十五
印刷人　秋場熊太郎　東京小石川區水道端二の四四
發行所　ミオヤのひかり社　振替東京四九三四八番

大正十年八月廿五日印刷發行　大正八年十二月十八日（第三種郵便物認可）

ミオヤのひかり

第貳卷　第十號

私のおのがはからひ打捨てゝ
　たゞみこゝろに順へよかし
阿彌陀佛にとはに照さる心には
　我てふものゝ影もとゞめず
天地もみなみほとけの中なれば
　ミオヤの外に住家やはある
まよひぬる雲にかくれて見へぬなり
　鷲のみやまの有明の月
草の上に置く露までもみめぐみと
　露ばかりだに思はざりけり
かぎりなき永遠の生命を養ふは
　念佛さまやの糧にぞありける
法悅の妙味をかてとする人は
　心はひろく體ゆたかなり

人生の宗趣

念佛三昧爲宗。往生淨土爲趣。

宇宙の主なる彌陀と三昧交感又は光明獲得を宗とす。光明の生に復活又は更生。現在は理想的涅槃（光明生命）未來は實在的涅槃。

宇宙絶待的主なる如來、衆生心想中に靈應身を以て交感す。斯の靈感即ち宗教的生命なり。

如來の靈應常に衆生の心殿に在して中心本尊として指導し玉ふ。

已に復活して靈的生活として光明中にありて如來照鑑の下に活ける如來を本尊として一切の時一切の所に於いて其神聖なる統治の下に靈き生命として事へまつる。

大宇宙の中心最高なる法界宮に在して眞善美妙を以て莊嚴せる如來は衆生の機感に應じて衆生の信心想中に映現して其の心宮に靈應身を降臨し玉ふ。是れ宗教的中心の本尊なり。

此時に從來の我は降服して如來の法子として聖き生命に更生したるものなり。靈應の指導の下に光明生活の向上的一路の光明大道。

宇宙の最高至尊の在す華藏世界に向つて其の如來照鑑の下に往邁進趣す。之れ現在に理想的に光明中の法子の進む大道なり。

彌々命終つて正しく涅槃なる華藏界に實在的に生れて文殊普賢の行願を學ぶべきものなり。

三昧に入れ

三昧と云ふは梵語にて等持定と譯す。佛法に無量の三昧あり。念佛三昧法華三昧華嚴三昧等何れの三昧にても三昧に入るには自己の精神全體を佛の中に沒頭して餘念なきに至れば我を忘れて其と己と一體と成つてしまふこと何事にてもそこに到らざれば妙を得ることは出來ぬ。それには精神が散亂して居つてはゆかぬ。是非統一せねばならぬ。禪宗にて坐禪を修するも先づ初めに精神の統一することを練習する故に能く禪を修めたる人は何事を爲すにも其の方に全心を投じて餘念なく事業を爲す故に其仕事が完全に出來る。故にこの三昧即ち精神の統一はよく習ふべきことである。其れには必ず眞面目でなくてはならぬ。三昧に入らざれば其の作す事が完全にならぬばかりでなく其業を爲すに興味を感ぜぬ。三昧に入れば自己の精神が其中に沒頭して餘念なきが故に其れに深く入る時は深く妙趣を感じらる。卑近の例なれども劇を好む人が其の劇場に臨むや其舞臺に演じて居る其狂言の中に精神が沒頭して我を忘れて居る所に其內心に深く興を感じて居る。其の如くに何事にてもさうである。

今念佛三昧を修するも全心全幅を如來の大慈光の中に投じて心々相續して

一へに念を投じ全く我を投入し、古人の、月や我我や月やと分かぬまで心にすめる秋の夜の月、といふ一心に物の中に我を投げ込んでしまうて全く無我の狀態となりたる所の妙趣を感ぜらる。念佛三昧のみでなく朝夕の禮拜に如來を讃唱するにも讃の中に我を投じて其に神が入る所に妙趣にいたる。

たとへば如來歡喜の光明に我らが惱みも安らぎて禪悅法喜微妙なる快樂きはなく感ずなり、と讃唱する時に唱ふる聲に心を誘はれて識らず〳〵に其靈境に入ることを得。其靈境に入る時は言ふも言はれぬ妙趣を感じらる。何事にも事を爲すには深く興味を感ずるに到らざれば其中に生命を見出すことは出來ぬ。其實境に觸れて生命と爲らざればまだ三昧と言ふに足らず。

念佛三昧また讃稱三昧何れも自己の精神が全く其彌陀の實境に觸れざれば活ける念佛にあらず。また一心に讃頌を唱へて、甚深難思の光明の至心不斷に念ずれば、と頌ふ時に我心も此中に沒頭して稱ふる聲に導かれて自然に彌陀の光明中に融け込んでしまふ。こゝに到りて彌陀の靈境の中に眞の我と生れ我彌陀の靈に活くるに到る。こゝにいたりて宇宙に周遍する彌陀の大靈と我が心靈との融合する所に我も活き彌陀の實在も此處に顯現す。こゝを三昧の境と名づく。

何人も心靈具有せざる者はない。只至誠深心を以て三昧を修すれば必ず妙處に達すること疑なし。

三昧の練修

すべて何事にても其業を完成し妙所に詣らんと欲せば至誠熱心に精練を要す。いかに立派な天資の良材たりとも之を完全に發揮すべき精練するにあらざれば其資性を完成することは出來ぬ。喩へば鑛物中の最貴重なる金剛石と云へども充分に琢磨するにあらざれば本性の光輝を發することが出來ぬ。人は各自本能に於て彌陀の日光を反映すべき心靈の寶石を具して居る。彌陀の靈光に融合ふてそが靈に活き靈の妙味を感じ身は娑婆に在りながら極樂の至

美至妙の快樂を感じ得らるゝ性を有つて居る。人々極樂に生れて淨土の快樂無比なるを感じ得らるゝ性を有つて居る。故に極樂に生るゝことが得らるゝならん。然らば必ずしも此身の命終らずとも、心神を彌陀の中に沒頭すべき念佛三昧を精修する時は必ず現身にて彌陀三昧の至美至妙の快樂を感じ得らるゝ何ぞ疑はん。只須らく要ず一心に勇猛精進に練習すべきである。たとへ科學やまた技藝等にても一心に鍛練して止まざれば必ず熟達することを得、殊に自己の靈性を發揮して大**ミオヤ**の無上至靈の光明を獲得すべき修行のために何ぞ一心を献げるに惜まんや。此一心の修行に依つて人は從來の非靈なる我より至靈の我に復活す。是人生の一大事である。若し心靈復活して彌陀の光明中に永遠に活きる目的なからば人生何の價値かあらん。我同胞衆に三昧の修行を勸むる所以である。

自己の人格を無視する勿れ

君は今現に人間に生れて居ると云ふことは確かに信じて居るならん。抑人間に身を受けたのが宗教の必要なる所以なのでまた宗教に依つて能く練修すれば心靈の光明發得できる可能性を有つて此世に生れたのである。君何故に自己の人格を無視して迎も我々は光明發得できぬと自棄する。若しか是が發得の可能性が具して居らねば人間に生れ來るべき筈はない。君は米を食ふはそれを消化して一分は同化して其血肉と爲し一分は異化して大小便にして排泄して居るではないか。其肉體が其れだけの働を有つて居る如くに君が心靈に靈の糧を與へ小兒の哺乳して漸々に養育する如くに靈を養育せよ。必ず君が靈に活きる人となりて人生を眞に意義ある價値ある永遠の光明を得たる人と爲りて光明の生活に入るべきこと何ぞ疑はん。君聞き玉へ。何人も人と生れたるからは大**ミオヤ**の光明に靈に活くべき可能性を有する故一方に**ミオヤ**の實在を信じ一方には自己の一心の信仰に依つて靈に活きる可能性を有するを信じて教の如くに一心に念佛三昧を修せば必ず成ずること疑なし。

但し靈の生活に復活せんに三の障害物あり。此が爲めに大概は靈に活きるの資格を阻害せらる。其三の障害物は何ぞや。經に憍慢と弊と懈怠とは此法を信得し難しと。此三は何れも靈に活きるの障である。憍慢なるものは自ら從來の動物生活を以て自ら得々然として從來の卑賤なる動物我なるを自覺せず故に自ら謙遜卑下して眞に高尚なる靈に活きんとの意志發らず。經に彼らは尊貴自大にして自ら横に道ありと謂うていかんとも降伏し難しといふてある。實に斯の如きの族は已に形は人間たりとも其意志が修羅道に墮していかんとも度し難き徒である。弊とは六弊とて、すべて心靈の卽ち菩薩の麗はしき靈に活きんと欲する高尚なる遠大なる意志の缺けたる人を言ふ。換へて言へば靈的人格要素の資格の缺けたる人、弊とはヤブレたる卽ち心の宗教心の器のカタワ者、不具者、心の眼耳無しの不具者のことである。世に宗教心の不具物の多いのは、一は是まで宗教が萎れて居た爲めに遺傳素質としても只肉欲の動物的肉欲の方面のみ發達した遺傳にて靈的方面に乏しかりし爲に弊族が多いのとおもふ。實に靈的素性の缺乏せる人間も度し難い。また三には懈怠である。心靈の精練は金剛石の琢磨である。なほ易い事業ではない。從來の肉の我に死して靈に復活するのである。全生命を献げて彌陀に投歸沒入して妄想我の皮殼から脫して**ミオヤ**の子たる靈性が**ミオヤ**の慈悲の光明に觸れて始めて復活するのである。

懈怠の族は靈に活くる資格のない族である。世に懈怠にして靈に活くる事のできぬもの程憫れなものはない。

五濁

釋尊は現世界を五濁惡世と名づけ五種の濁流ありて人類を身體にも精神にも害毒を與ふるものである。世界には滔々として此濁流漲りて人類を此の汚毒の中に鑒殺せんとするの勢力あり。

之を根本的に救濟せんが爲めに釋尊は此世に出玉へり。**ミオヤ**の光明によ

りて五濁濫沒の濁中より救度の道を敎へ玉ふた。五濁とは劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁是なり。

一に劫濁。　劫とは長時即ち時といふことにて終始有爲轉變少しも斷ゆる間なく遷り行く此の世の中は折々に種々の惡い流行が行はれて人の心を濁流の渦中に溺濫せんとす。例へば戰爭とかまた流行病とか種々の惡弊の流行または騷動等の如きかゝる時に起り來る。濁流は相互に加はりて暴流の渦中に慘害を演出するは此世の免がれぬところ。されば佛陀世に出で給ふことは劫濁の世なれば

ミオヤの光明の下に自覺して此濁流に溺れて現在より未來永遠の闇黑に墮落せぬやうに劫濁の世と云ふ標榜を立てゝ此の時々の流行濁濫をば、**ミオヤ**の光明の外には此の禍害を免るゝことなきことを敎へ玉へり。

二は見濁。　見とは人の心靈の目が無くて靈觀、未來觀、宗敎觀、成佛觀などゝ云ふことは眞闇にて見えぬ衆生のことなれば如何に心を用ひて成佛すべきや、またいかにせば六道の輪廻なるかも、過去も未來も闇くして分らぬ凡夫同志のことなれば、實際分りもせぬのに分つたつもりで人は死せば魂は天に還へり魄は地に歸すとか思ふなり。また人の靈とて物質の細胞の外に別に有るものでない。故に人の生殖細胞が兩方から合うて一個の人と爲つたのであるとか、種々の見こみの誤からまた誤まられて皆濁流に溺れて闇の中に墮つてしまふ。是に於て釋尊世にお出ましなされて衆生の心靈の大**ミオヤ**の光明を仰ぎて各自の心靈の眼が開くる時は始めて人生の眞意義もわかり現在より永遠の光明に入るべき眞理を敎へ玉へり。衆生よ、汝等はみな見濁の世にありて濁流に濫溺して永らく沈淪してはならぬといふことを示し玉へり。

三に煩惱濁。　是は人間も本々動物である。依つて動物欲は本能的に有つて居る。貪欲瞋恚愚痴を本として一切の動物欲をもつて居りて而して意識も發達して居る。只牛や馬のやうに只本能的の欲でなく惡るゴスイ意識を惡用して動物欲を逞ましく働いてゐる。故に是非とも宗敎が無くてはならぬ動物

である。されば釋尊は世に出て世は煩惱濁の世と標し玉ひしなり。

ミオヤの光明に依つて、此の濁濫の渦中に卷きこまれぬやうに教へを垂れ給うた。

世尊の御教によりて**ミオヤ**の光明に靈化する時は煩惱も變じて喩へば澁柿の實も甘ま干しとなるが如くに靈化する時は人生の妙味窮りなきを感じらるゝに至る。

四に衆生濁。　衆生とは即ち社會である。衆生が繁殖すれば益社會が濁濫して種々の黴菌が發生して相互に競爭して强者伏弱種々の紛擾を起し、黨を組み派を立て、風を發し波を起して只己を厚くせんとし、他の汗膏を絞りて己れが肉を肥さんとし風教を亂し習串を汚し濁濫極りなし。

されば世尊は此世に出で玉ひて社會を濁濫の渦中より救ふ光を與へ玉へり衆生相互に於ては濁るものゝ各自の精神の奥底と大**ミオヤ**より受けたる靈性あれば御教に隨ひて**ミオヤ**の光明に照されなば各自は相互に同胞の眞を得たるに至らむ。これ此世は宗教の要ある所以である。

五に命濁。　命は卽ち生命を保存するにつきて起る濁りにて是生活より起る弊害である。生存の競爭激しく生活難よりして知慧を悪用して動物的に活きんとするは凡夫の弱點である。

全體この生命は、**ミオヤ**の賜にして永遠の光明に向上すべき人生なるを自覺せずして狡猾なる動物に活きんと欲するもの教を受けざる時は皆々爾りと云ふべきである。貴重なる人生を空しく闇黑裡に葬り去る如きは實に憫むべきの極みである。されば佛陀世尊は此の濁濫より救ひ出さんが爲めに世に御出ましになりしものなれば

ミオヤの聖意に叶ふべき價値ある生命とし、永遠の光明に到達すべき人生の眞理を教へ玉うた。此の世界を五濁惡世と標榜を立て人に知らしめ玉うた所以は此世は五濁でありて仕方なき世界と厭惡して仕舞へといふ意味ではなくして宗教の必要ある世界であることを自覺せしめて可惜人生を五濁の渦中に

溺れて未來永遠の闇黑に向ひ生死の暴流に流轉して極りなきを憫み一切の人類を斯の如き五濁濫漫の中より救濟せんために佛陀は世に出で玉ひしなり。

誌料一部前金五錢、郵稅五厘、一ヶ年前金郵稅共六拾六錢
大正十年八月廿五日印刷發行（毎月一回發行）
編輯兼發行人　岩品誠信
印刷人　東京京橋區本八丁堀一ノ十五　秋場熊太郎
發行所　東京小石川區水道端二の四四　ミオヤのひかり社
振替東京四九三四八番

大正十年九月廿日印刷發行　（毎月一回廿五日發行）　大正八年十二月十八日　第三種郵便物認可

ミオヤのひかり

上人御遺稿

かぎりなき三世の佛のかず〳〵は
一りミオヤの分れなりけり
世の中にありとあらゆる物として
量りなき身のわかれ〳〵ぞ
天地のなべてのものにことごとく
光り放てるみほとけいます
宇宙にあらゆるちりの塵ごとに
數限りなきほとけます
心とも物とも今はおぼゝへず
たゞみ一りのミオヤにませば
天地のよろづの中にましませる
ほとけは常にのりを說きます
いかばかり細かに分れたるものも
其まゝ本のミオヤなりけり

第貳卷　第十一號

如來の光明と日光

如來の光明は何なる相と能とを有ておるかなれば、此私共の身體は太陽の光明に活されてをる若し太陽の光なかりせば此身體は活きること出來ぬ。

私共の心靈は如來の光明を受けて靈的に活きることを得る如來の光明に對する觀念は太陽の光にて萬物活ける如く如來の光明に依て淸き信仰心が活る即ち永遠の靈的生命は如來の光明に依て活ることである。一切の生物が太陽の能光に依つて動物的に活かされてをる如く、如來の光明は人を聖靈的に活かす能力を有つておる。

太陽と如來光

如來の光明は超日月光と申して太陽の光よりは高等である世には太陽に超えたる光明何れに在るやを問ふ人がある。けれども如來の光明は肉眼に認むることができぬ。が其光明を被りたる人は精神的に靈的に活きて只だ太陽の光にて動物的に活きてゐる計りでない如來の光明が大陽の光明に超へて高等であることは何に依て證明せらるゝことなれば日光と如來の光とは物質的肉眼を以て比較することは出來ぬ、けれども其光明を被りて養成せられたる人の精神に於て證明せらる。日光は人を動物的の形骸を活すなれども人の精神を靈化して高等なる信仰の生活に入れて淸き人として活かすことはできぬ。古今に亙り靈的偉人の最も圓滿なる人格は如來の光明に依て靈化せられたる結果に外ならず。

光明は見へねども觸るゝ

春の氣候は天より來るも見へねども春來れば暖溫なる和氣が徐ろに到り新綠萠發しまた蕾の芽生して花開くが如く如來の光明は眼には見へねども只だ如來は實に在すことを信じて一心に念佛して至心不斷なれば漸々に光明に觸るゝことをう、然る時は自然に自己心中に發現し來る靈的氣分は春の氣候に萠發する芽生の如くに一種云ふべからざる靈的氣分有り難いと云はんか歡喜と云はんか、この喚起し來る心を信心喚起と云ふ故に經に其衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴躍して善心生ずとは斯如來の光明に觸るゝときは人の心が一轉して靈性の生れ來る心理狀態を說き玉ひしに外ならず。

古人が、秋來ぬと眼にはさやかに見へねども吹き來る風にぞ驚かれぬる、と詠し如く如來の光明とて眼には見へぬ然れども只如來の大悲を憶念して一心に念佛して心々相續至心不斷なる時は、天地に漲ぎる如來の靈的光明に自己の奧底に伏する心靈に一種の靈的氣分が響きて秋風の寂寥を感ぜし如くに實感し來るのである。

淸淨光

念佛の一行と十二光。行は一心に彌陀一佛を念じ自己の一心統一してまた能念所念とて自分の心が彌陀を念じて彌陀の外に我念なく我念が即ち彌陀にて彌陀が即ち我心となるやうに、一心一行漸々深く進むに隨つて我心と彌陀と離すことのできぬ心の狀態である。喩へば炭に火が燃つりし時炭全體が火となり火即ち炭を燃す如くに我心の闇、煩惱の炭も彌陀の光明を念じて念々彌陀に相應する時は煩惱の炭も如來光明の心と化す。これを念佛心と云ふ。然れば即ち一心念佛一行なれども一行の念佛によつて心が彌陀の光明化する時は心の體は本一なれども光明に化したる心の相は種々の方面に觀ぜらる。人の心は本一體なれども四類に分類することができる。感覺と感情と知力と意志とである。感覺とは眼で視、耳に聽き、鼻に嗅ぎ、舌に味ひ、身に觸れて起る處の心の相にて之を佛教にて眼に色を見わけるを眼識界といゝ耳に聲を聽覺するを耳識界といゝ鼻にて嗅覺するを鼻識界と名づく、すべて此れを五根と云ふ。一體凡夫の心は此五根の爲めに眼にて嬋娟たる峨眉紅顏を視れば忽ちに執着の念が生じ、即ち眼の慾耳の慾口腹の慾抔の爲めに惑かれて、此色と聲と香と味と觸との五境に對して六根が常に染さるゝ故に六境を六塵と云ふは人の五根を通じて心を染汚する故に六塵と云ふ。日々の見聞覺知から心を汚すことは常に斷ぬ。

例へば人の身體は活てゐる限りは肉の分泌物が毛孔から分泌するのと亦外から塵埃が附着するのとで垢穢が常に身につく故に清き水または溫湯を以て垢を洗濯するの要あり。

また衣服にても敢へて能く垢を附着せざるとも自づと衣物に垢がつく故に洗濯して之の垢穢を除きて清潔になれば氣持よくなる。外の垢は感じ易きが故に之を洗濯の必要を感ずるけれども心が常に六塵から染汚さるゝ垢は中々に強くして、また啻に身體や衣服の垢よりは人間の最も貴重なる人格の上に及ぼすことなれば實に最も心の垢を淨めて六根清淨にして人格の光輝を發すべきなれども、そこが凡夫の淺ましさである。顏面や外皮膚の垢つくのが

他見を憚ることは感じ易きなれども己が心の垢が自己の本人に對して慚愧の感が少なきは是れ人の心の淺間敷ゆへなり。こゝが凡夫と聖人との異れる處なり。

常恒に眼前に在します如來は我等が肉體の面を見玉はず我らが心を照らし玉ふ故に、我等は如來の御前に慚ぢまた己が心靈を愧ぢ。ア、實に我らは淺間しき凡夫である、自ら人格を高等に進ませんとはせで自ら肉欲の奴隷となり六根より六塵の爲汚されて夫に愛溺して自ら清淨高潔の心をたもつこと能はざるは實に野卑である。

されば遺經に當に五根を制して放逸にして五欲に入らしむること勿れと。五根とは、眼耳鼻舌身にて五欲とは眼に色を視、耳に音を聞き、鼻は香を嗅き、舌は味をしり、嗅は物に觸る、此の眼や耳より肉の快樂を貪ぼるを五欲と名づく平生に愼みて能く五根を守りて能く制裁せよ譬へば牧牛者が杖を執つて之を視して縱まゝに人の苗稼を犯さしめぬやうにせよ、若し此眼の欲耳の欲を縱にせば唯五欲の將さに涯岸なうして制す可からざるのみでない（五中一例を擧ぐれば口の欲酒飲の如きは是酒が始めは少量にても醉ふて愉快を感ずるも刺激に抵抗する性が有る故に漸々に發達して終には多量に飲まされば醉はず段々に昂進して屢々飲酒する時は習慣性と爲りて必需として無くてはならぬやうに爲りまた病的となる而するときは酒の氣がなければ體も持たぬやうに爲る其の害は身體の機能を毀損して病氣となりまた其の毒を遺傳して子孫の體質を病的にするが如き）遂ひには如來より稟けし自己の靈性を滅亡ぼして再び靈に活き更へるてふ時期を失ふて仕舞ふのはまことになげかはしき次第である。

如來の淸淨光は人の五欲の爲めに汚さるゝを救濟する大なる力を有つてゐる。

凡夫の習ひとして五欲の爲めに自己の人格が墮落しまた衞生等にも甚だ害あることを知り乍ら自らの力で之を改正することが出來ぬ、また概くは自暴

自棄に爲つて迚も自分で人格の改造ができぬ。夫は自己の靈性が永遠の生命を信知せぬ故に自分を只此動物的生活の方面から計り認めて居るのである。

自己は尊き靈性を有てをる。清淨光に依て清められて日々に六塵に汚さるゝ六根を清淨にして自分の此眼に來たり與へられたる清き眼である、眼の欲の爲めに惑はされていかに翠黛の蛾眉の爲めに惑はされて人格墮落してしまう如きは汚らはしいことである。

清き光よ我らが眼を淨めてあなたの眼の如くに清くして給へよ。

清淨皎潔にして滿月の如き人格たれ

人は此人品即ち此形骸の上にはいかに立派なる、卽ち在原業平、平井權八などゝ形骸の上から世に稱せられたるも其の品性に於て皎潔にして珠の如くに光彩を放つべき人格にあらざれば何んぞ云ふに足らん。實に現代の青壯年の志氣は明治の物質の文明進歩が只物質の方面にのみあせりて、品性の內的改造するに追ない程であつた爲めに內部の道德的人格を造る方は外部の進歩發達には比較にならぬほど劣つてをる。

人格改造の清淨光

如來の光明獲得の目的は自己の人格を改造する處にあり。人類は他の動物と異にして必ずミオヤの光明によりて自己を覺醒してあるべきやうに自己を指導し改造して光明の中に生活すべきものである。否ナ光明の中に入るが故に人格が一轉するのである。

他の動物は本能的に眼の欲耳の欲また色食の欲でも本能的で、換へて云はゞ天から與へられた丈を正直に守りて食物でも飢うれば食ふて飽けば止めて敢て人間のやうに貪らぬ、また生殖の本能にても春期が至ればたゞひ狂ひ爭つて色欲を逞せんとするも其期過ぐれば其欲も止む。人間は天の特寵を得ることも云はんか自由を得るが如きまた智惠も進み意志も自由にてすべて心の作

用が發達しておる丈けに自から能くあるべきやうを覺りて色食の欲にしても清淨に自ら分を守り節を保ちて清淨にせざれば天賦の體質を傷ひ動もすれば生命をも促むるに至る。

自己の身體及び五根及び一切の生理機能は卽ち口腹の欲を恣にする爲めに胃腸を傷ひ消化器を害するやうなことをせぬやうに自ら能く覺りて清淨にせよ。一切の食物は生命を養ひ自己に賦與せられたる天職を全ふする爲めに與へられたる身體及び一切の機能を完全にして而して此世に出たる天分に叶ふやう力の有限り努力して清淨自活してミオヤに報ひ奉るべき使命に用いる身を只美味を貪り酒に耽りて飽くことをしらず、闇黑の中に沈淪して不淨不潔の身となり病を求め命を縮む如きは實にミオヤに對する仇といふ外なし。人類には夫が爲めに理性と云ふ智惠を以て生理上の智も道德上の智も能く明らかに識らるゝやうに智の作用を賦與せられをるにも拘らず只其のミオオの使命を果すべく人格を高尙に殊勝に進ません爲めに與へられたる智惠を還つて惡用して只智惠を以て動物欲の本能を逞うせんとするが如きはミオヤの聖意に叶ふ筈がない。

清白皎潔にして生活せよ、是れ清淨光裡の生活である。

人は改造すべき精神的生物

犬馬の如き動物は本能的にして自己の本能のまゝに發達してゆけば犬は犬の本能の働き馬は馬の本能あり、人間も動物であるから一方より見れば動物的の本能の性を有てをる事は異らざれども、人類は食物にしても料理をして食ふごとく之れを化する機能に於ても人間的に習慣性を爲してをる故他の動物と同じからず。人間は生れたまゝの本能計りでなく終には理性の如く學修によりて修業の結果として高等なる知識の働きを爲す。他の動物には理性が發達して居らぬ故に人間の如くに學業を以て知識を磨く必要がない、人類は動物と異にして學業を以て修練せねばならぬ理性を以てをる。

例へば鑛物の類にても素朴なる石の如きは天然に自分に有てる朴質のまゝにて還つて風致の見るべきあり、朴石を琢磨するも光を放つべき性なきのみならず還つて天然の風致を破壞して了う。然るに高等なる寶石や珠玉に至つては充分に琢磨して始めて其の有せる最も貴重なる性質を發揮して光輝燦爛として光を放つ如く、人類の頭腦に潛伏せる寶石は之を琢磨して實に尊重なる本性の光が發揮す。人は唯教育を以て理性の知識を研くべき斗りにあらずして其の奥底に有せる靈性は人類の頭上の王室にして之を開發し其の靈性の光を發揮して始めて人に萬物の靈長の德性が顯はるゝなり。

天より賦せられたる人の頭上の玉座に嚴臨すべき靈性は是を佛教にて佛性と名づく。人は佛性を開きて、この光を以て自己の動物性を自から制裁し指導して光明の大道を如實に行爲すべきである。

誌料一部前金五錢、郵稅五厘、一ヶ年前金郵稅共六拾六錢
大正十年九月廿日印刷發行　毎月一回發行）
編輯兼發行人　岩品　馘信
印刷人　東京京橋區本八丁堀一ノ十五　秋場熊太郎
發行所　東京小石川區水道端二の四四　ミオヤのひかり社
振替東京四九三四八番

大正十年十月廿五日印刷發行（毎月一回廿五日發行）大正八年十二月十八日（第三種郵便物認可）

心の光

第貳卷　第十二號

永生の光

辨榮上人御遺稿

天地は廣大に宇宙は無邊である然して天の有ゆる星宿も各々世界とすれば世界は無數である其中に活ける物も亦無量である。有ゆる世界及一切生物を佛敎では悉く總括して十法界に攝めて道すことない。我らが此形の生存するのは無形の心を本とする。一切生物の本源たる宇宙には宇宙全一の大心靈あり之を佛敎で如來藏心と名づく。一切の世界と生物とは夫から發現せしのである。大心靈から産出されたる世界と生物とは悉く心を本とす。此心が因緣に依りて十界種々の生物と爲る之を衆生法と云ふ。斯心が大心靈の光明を得れば衆生が悟りて佛と成る之を佛法と曰ふ。此心に光なき物迷ひて六凡と爲り光を得たる物は悟りて四聖と爲る。故に六凡と四聖とは心を本とす。經に心と衆生と佛とは本來無差別と說給ふ。心から十法界の身と心と國土とを生ず、實に不可思議である故に妙法と云ふ。

心十界を具し又十界を造る

宇宙全一の大心靈から發生れたる十法界の衆生なれば一切の個々は悉く其子として個々の心に六凡四聖十界の性を具有ておる、然して其働きの最も强き物を造り出すものとす、各自の心に十界の性を有ておる故、緣に觸れては鬼の樣に恐ろしき殺氣が起る其地獄の性、亦他の榮を嫉み慳貪を起す餓鬼の性恐痴横暴は畜生の心憍慢僞德は修羅の因、人隙落の中にも良心の責を感ずるは是人の性、慈善や公德の分あるは天上の性である、又眞理を聞ば悟りたいと思ふ是聲聞の性、生死の理を明めたいと想ふは是緣覺の分である、縱令無佛論者でも絶待の場合には自から稱名の聲を發す是佛性あればなり、恁の如人々十界の性は具さに有ておる、然して何を造るかは種々の因緣から其生涯の業に由て決定す、之を業十界を造ると云ふ。

十界の略說

地獄界　是れ三塗の中に火塗と云ふ、八大地獄乃至數多の地獄あり、罪の輕重に依りて苦を受くると同じからず、然れ共火に燒かるゝ苦同じ故に火塗と云ふ、大焦熱無間等は最も劇苦の處、十惡五逆の衆邪見の心から倒さまに落て烈火に燒る、罪業の薪ある限りは火消ることなし之を地獄と云ふ。

餓鬼界　或は山林塚廟に祀らる鬼神あり、又不淨處に在りて飲食を得ずして飢餓に苦しむあり、何れも鞭撻をうけ刀劒を以て截切せらる如き苦あり故に刀塗と云ふ、有財餓鬼あり食物豐かに有れども口少くして喰ふこと能はず苦しみをうく、昔世に財を積こと山の如くし、强欲に依りて罪を造りし報ひ、

無財餓鬼が飢餓に苦しむは宿世に自から活業を勉めずして酒に耽り色に荒み肉欲から罪を造りし報である。

畜生界　動物相互に呑噬して血を流して苦を受く故に血塗と云ふ、畜生又は傍生と云ふ横さまの生物の義是天理人道の正きを行はず理に聞く横さまの行爲から受くる身である、羽毛鱗角乃至昆蟲等に至るまで三十億の種類ありと世に形を人類に受乍ら横暴なる虎狼に類し破廉恥なる犬の如く人を魅すこと狐に似るあり、身は人たるも心意と行爲は畜類より劣れるあり恁の如き因あり何ぞ畜生の果無らん

修羅界　斯界に身を受れば常に鬪諍を事とし勝敗定りなく唯負くることを憂えて恐怖の苦休むこと無しと、世に憍慢暴高の野心家、ナポレオン、カイゼルの類より下は劣等なる野心家身の分を顧みず名譽又は權威の爭ひに逐鹿の鬪を挑み彼ら內に誠實なく外皆善を裝ひ自から是とす、之修羅道と成るべき性格である。

人間界　從今形は人類たるも人格具備せざる者は未だ眞の人ならず。人身を受たる物自から人格備らば敎育に修身科の必要なからん、佛敎に謂ゆる五戒を保ち儒敎に云ふ五常に叶ふ人にして人格具はりたるものとす、世の敎育及び人道道德は全き人を形成するを目的とす。

天上界　六欲天と色無色との三天あり六道中最幸の處、欲天は高等なる快樂をうく是れ樂と樂しみを共にする仁人君子生るゝ處、梵天は冥想觀念又は禪定を以て思想を精練したる梵土の到る處、最も淸明澄潔にして形なき如き定力の感ずるは無色天とす、恁く善惡各三等に分ち苦樂の果を受く是らは生死の凡夫故に六凡法界とす。

聲聞界　先覺者の敎を受て道を修め悟をうる故に聲聞と云ふ、四諦の法を以て得道す、一に凡夫の受くる生死は實に苦なりと諦に認めて之を出んとす、二に生死の苦因は煩惱であると認めて之を斷せんとす、三涅槃靜樂を諦かに證るを滅諦と云ふ、四に涅槃を得る道品を諦かに修む、聲聞に四階あり最後を羅漢とす、此に到れば生死を離れ眞空涅槃を證し三明六通八解脫をうると。

緣覺界　十二因緣を悟りて涅槃を得る故に緣覺と云ふ、十二因緣とは無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死、生死の根本は無明なり無明滅すれば生死を盡す故に永生の涅槃を得神通等は聲聞と同じ。

菩薩界　上求菩提下化衆生とて自ら成佛を期し下一切衆生を導き自他共に佛道を得んと願求す、大乘佛敎の成佛を期する者は是菩薩とす又佛子とも云ふ是佛の子頓て覺と同じく成佛するの謂てある、此に生身と法身とあり、觀音勢至文殊普賢等は法身の菩薩、龍樹天親聖德善導空海法然等は生身の菩薩である、已に佛心を起したる人は卽ち菩薩にて例へば、如來は靈界の太陽にて凡夫の心は晦日の如し菩薩の初發心は纖月の如く、漸々に光を增長して竟に滿月と爲れば佛陀と成りしのである。

佛陀界　智慧慈悲等の萬德悉かに備はり一切種智を得て自ら覺り他を覺らしめ萬德圓滿して缺くことなきを佛陀とす釋迦牟尼是なり、四聖の中聲聞と緣覺とは眞の成佛に非ず唯佛陀のみ究竟して無上道を得たりとす。

大乘の歸趣

大乘佛教にて人生歸趣の理を明し玉ひし法華經に、佛が此世に出給ひし一大事の因緣は、衆生の佛知見を開きて佛の正道に入らしむる爲である、云換れば凡ての佛性てふ佛に成り得る性を開發し靈育して成佛せしが爲であると、又譬へば此に財寶無量の長者あり王子が付て父の許を迷ひ出で、遠く塞里に在りて甚だ零落し困苦す、父は之を憐れみ方便して子を呼びよせ初は自から子たることを覺らぬ故に先づ不淨の掃除拭を爲せ後に財寶を悉く其子に讓與すとの喩を以て釋會が衆生に對する本意を說玉へり、由之見れば我らは佛の子であれば佛の如く全きに成り得らるゝものである、之を復活する光明は卽ち佛法なるを信じて永生の涅槃に歸趣するを大乘佛教の目的とす。

自己の人格の核はいかに

果樹類が春は花咲き秋の末に實の成熟するまで一年の働きは生產起元の作用なる種子を造る爲である凡ての種子核には生物の元形質の細胞が一切の枝葉根莖等が嵌込式に伏在して其が緣を待て萠發して遂に大樹となる種子核が熟せぬ實には生產作用がない、此理は人格の核を成す神識にも比例せらる、人涯の善惡の業はアラヤ識の核と爲て其種子に嵌込みて地獄乃至六道の自體果を生ずべき能力と爲る、因あれば必ず果あり因果相關し六道に輪廻す、我らか生涯の業人格の核が十界の中何れを成熟すべき哉は各自の心意と行業に由る、果竟自業自得の結果が我が人格の核となるものとす、佛教は衆生をして六道生死を出でゝ永生涅槃に歸るにあり、卽ち人々本具の佛性の心地に佛種子を播し之を培養し心靈の花開き永生の實を結ばしむにある、恁の如きは靈的人格とす、人いかにして靈格の核を爲さしむべきやは後篇に述ん。

如來の三身

大乘佛教を知らんと欲せば、先づ如來三身の譯を能く了解し給へ、如來は本一體なれ共、一方には一切を產出する本と爲て法身と云ひ、一面には法身から受たる衆生の心靈を攝化して永恆の常樂に歸らしむ報身と名づけ、又人類を救ゆる人佛釋迦と現れては應身とす是を法報應の三身とす。

法身　梵に毘盧遮那、譯すれば偏一切處と云ひ宇宙全體を身と爲るの謂てある前篇に宇宙全一心と云ひしは宗教的に表せば法身佛とす、故に宇宙は永遠に活ける佛である、形式としては天の日月星晨の運行より乃至地上の一切生物い生成に至る迄の萬法の原則の故に法身と名づけ、內容としては此毘盧舍那の胎內に無盡の性德を具有し萬物を產出す故に如來藏性と云ふ、法身の親から產出されたる衆生なれば衆生も皆小法身小道物である、夫と共に佛に成り得らる性を有ておる、然るに人の具せる佛性は喩へば鷄の卵子の如し之を孵化せば雛と爲るやうに衆生の佛性の卵を攝取し靈化して佛性を復活さしむるは卽ち報身佛である。

報身佛　梵に盧舍那、譯すれば淨滿、亦光明遍照と曰ふ淨滿とは如來は萬德圓滿して宇宙最上の位に在まし紫金の身に無盡の相好を具へ衆寶莊嚴の淨土に眞善微妙の園に淨樂我常の花匂ふ處に法身諸の聖者の爲に佗受法樂を施し玉ふ故に淨滿と名づけ、又光明徧照とは卽ち如來は靈界の太陽にて例へば

大陽が光熱化の能を以て生物を化育する如く如來は、智悲慈悲威神の光明を以て衆生の心靈を靈育し玉ふ若し日光なくば地上の生物が生存できぬ如く、如來の光明を蹈れて衆生成佛すること能きぬ、如の靈德無量である、十二光を以て萬德を總括して遺さぬ、斯光明が卽ち一切衆生の心靈を復活せしむる靈力である。

應身　淨界の報身から身を分けて此世に出云ふ釋迦牟尼佛を應身とす、釋尊が世に出玉ふ本懷は一切衆生を闇の裡より救出し永遠の光明に入らしむるにあり、卽ち報身の光明に歸命して靈を活さしむなり、佛は八十歲にて入滅し玉へども神は無量壽の本土に還りたまひしにぞ。

斯の三身は唯一の無量光なる無量壽佛である。

報身の光明

心靈界の太陽なる一切衆生の心靈を攝取し靈化し玉ふ光明實に不可思議なり、一切諸佛は斯光に依りて靈に活きて正覺を成し玉ふ、一切萬德を攝めたる十二の光明に就て活ける佛法をたどる時に靈に活くる道は卽けん、實に釋迦一代の敎は悉く十二光の中に盡きて遺すことない。

無量光（如來體大　絕對の大靈能）

良に彌陀は十方一切諸佛神明の本佛にて一切萬法を統攝し一切萬德の歸する處、正覺の光徧く十方照して衆生を佛化し玉ふ故に無量光と名づけ、一切を永恆の常樂に歸せしむ故に無量壽と爲す、諸佛の正覺を取たるは卽ち無量光を得たること常恆の涅槃を證すとは無量壽に入たるの謂である、故に諸佛は此光明に依て正覺を成し無量壽の涅槃を得玉へり。

無邊光（大智慧の相徧照せざる無し）

日光の世界を照す如く如來四普の光明徧ねく十方の心靈界を照し衆生の知見を開き一切智を與玉ふ、四智とは。

一、大圓鏡智　例へば日光出づれば地上の山河大地乃至一切の萬物悉く顯はる如く如來鏡智の光にて衆生の無明黑破せられ十方三世一切の依正色心悉く現前す。

二、平等性智　我らが吾我分別の迷を照破し各自の自性は本來淸淨にして諸佛と同一平等なりと自覺せしむ。

三、妙觀察智　如來我に入り我れ如來に入りまた如來の身口意の三輪は我らが三業に涉入し我らが迷の意識は轉じて佛智と相想せしめ一切種智を興へ玉はる。

四、成所作智　我らは汚れたる心から五根も汚れ依て不淨の五塵界を感す若斯智に同化せらる時は佛眼乃至佛身と成るが故に諸佛と同く相好及び淸淨國土を實感す。

斯四智は凡夫の無明の阿賴耶識を轉じて佛陀の四智に同化し玉ふ光明である。

無礙光（衆生の靈格を作り玉ふ德）

斯光は衆生の弱點なる煩惱を解脫して至高の道德とし聖き人格卽ち佛と成させしむ德用である、如來最妙なる眞善美の靈界に在まし神聖正義慈寵との三德を以て衆生に優臨し玉ふこと太陽の光熱化を以

て生物界を化育するが如し。

一、神聖としては如來は道德律の日光として至善の座に在まし道德の原則と爲り又至善の標準と爲り衆生の行道を照鑑し且つ行爲の正智見を與へ玉ふ。

二、正義としての如來は我らが邪と惡とを捨て正と善とを撰みて向上せしむる勢力を與へ玉ふ捨惡撰善の原である。

三、恩寵としての如來は衆生の慈母とし一切を愛し佛性卵を化し我ら佛子を靈育し長養し玉ふ。

斯三德は如來が衆生の父母として聖き人格即ち佛と成すの靈用である。

無　對　光（衆生に正覺と涅槃を證せしむ）

斯光は如來が一切を攝取し玉ふ終局は衆生をして諸佛と同く正覺を成し大涅槃に入らしむにあり、如來と衆生とは本來親子たるに拘はらず現在は正反對に立ておる、如來は絶對無限眞善美等にして衆生は有限生死罪惡闇黑等にあり若し斯光に攝化せられる終局は無明を變して正覺の光とし生死を轉じて涅槃の常樂と爲す涅槃とは即ち極樂の淨土淨樂我常の光輝く處、常寂光土又蓮花藏世界無量光明土等の異名あり、一切諸佛は常に此涅槃界に在て一方には常恒に生死界に來りて衆生を度し、一切衆生が靈に活き究竟成佛の曉は諸佛即ち彌陀一佛彌陀即ち一切諸佛の義を證らん。

炎　王　光（衆生の煩惱を脫却する力）

一切衆生に齊しく脫却せねばならぬ弱點を有ておる之を煩惱と云見思と塵沙と無明とである衆生は此煩惱の爲に靈に活きることできぬ是動物欲と及び意識的の惡にて煩惱から業を造り業から苦報をうく衆生念佛して斯光に觸る時即ち煩惱脫却す大火炎に汚物を燒くが如し喩を以て光明とす。

光明に靈化せる衆生の心相

經に若し衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔輭に歡喜踴躍して善心生ずと、又如來の光明は遍く十方世界を照せども念佛の衆生のみを攝取して捨てずと、衆生佛性の卵は如來の慈光に孵化せられ、闇黑の我は死して光明の我と生れ生死の凡夫は轉じて永生の佛子と爲る、我ら苦と惱と闇と罪とに亡びゆくを復活し清き喜と悟と善とに靈化せらる、光明淨化の心相を略解せば。

清　淨　光（人の感覺を淨化す）

此光は人の汚を滌ぎて清く美しくする作用である、凡夫は眼に視耳に聽き鼻に嗅ぎ舌に味はひ身に觸れ美色美味杯の爲には衛生及び道德をも顧ず之が奴隷と爲り又は墮落の淵に沈むあり、此五欲人の心を染汚す故に五塵と云ふ、又人の德義心を賊ふ故に五賊とも云ふ若斯光に淨化する時は自己の靈性八面玲瓏として身心皎潔なるを感じ又美化したる感覺は天地新らしく靈日麗はしきを覺え恰も赫々たる日光が寶石に映ずる如く亦心靈の花開き馥郁として靈感極りなく天樂和雅の音を揚げて心耳の快感を覺へ八功甘露の水は津々として舌を潤ほす、淨化したる感覺より見れば處として淨土ならざるはなし。

歡　喜　光（苦を拔き樂を與へ玉ふ）

我ら凡夫の感情には煩悶懊惱極りなく恐怖憂愁絶ゆることなし即ち煩惱である、若し如來の斯光に融

合し心神美化する時は內心常に平和に心廣く體肝かにして法悅の樂に三味の妙味を覺え常磐の春麗らかに心靈の花匂ひ香氣徐々として靈感極まりなし即ち身は娑婆に在り乍ら神は常樂の園に遊び形は憂世に置なれど靈は彌陀と共に在り、斯光諸佛は受けて自受法樂と爲し菩薩は享て佗受法樂を感ず、若し國土に現はるれば光榮と幸福とに輝ける極樂國土と爲る、吾が友よ眞の靈福を得んと欲せば須らく斯光に來たれ。

智　慧　光（迷を轉じて悟を開かしむ）

元來我ら凡夫は生死問題及び靈界の消息に就ては實は無智である三世因果を照す知見なく佛身及び佛土を見るの明なし、然るに世には自己靈性の盲目たるを識らず還て無佛無靈を主張する族あり、若し自己の無知を自覺し、一心に念佛し三昧成就し如來智慧光の太陽が顯はれ來る時正知見開けて佛身及び佛土を知見し又佛智佛德をも悟入することをう、例へば日光出ずれば萬物明かなる如く斯光に依て一切の佛法現前す、一切諸佛の智慧とは斯光を得たるに外ならぬ。

不　斷　光（惡を廢め善に進ましむ）

我らの意志は卑劣な我慾から動いておる即ち煩惱の奴隷である、人が善想の二つに分るゝ所以は意志方向のいかとに依る、人々前に述た十界の中何れかに向つて行爲しておる人の意志は不斷に持續し我の志望む方に向つて働く夫れが繼續すれば習慣と爲り竟には性格と爲り然して地獄とも又佛心とも決定することになる、若し斯光に靈化する時は罪惡我は轉じて靈我と成り闇黑の生活より光明の生活と變す釋尊生涯の行爲宗祖の活動は我らに好模範を示しなされし我らは佛の子である親の如く全からんことを願望とす如來の聖意を我意とし不斷に向上し自ら進むと共にすべてを誘ひ自己と同じく成佛せんことを願望とす佛子が靈的活動を爲せる原動力は即ち如來の不斷光である。

信仰過程の三階位

如來の光明に復活されし心相は已に明しぬ此よりは初發心より靈の生活に入り及び向上の道程を明すに三階位とす。

難　思　光（信心喚起の位）

經に若し衆生ありて其光明の威神功德を聞て日夜に稱說して至心不斷なれば意の所願に隨つて其國に生ずることを得て乃至佛道を得ると云々。

一切衆生に悉く佛性を有す何人も佛に成り得らる心田を有おる煩惱の雜草繁けれど業障懺悔に心田を墾やし、如來光明の眞理を聞て信仰の聖種を爲り師及知識の保護をうけ殊に自ら至心不斷に念佛を執持して止ざる時は信心の萠發と爲る、信心の喚起に自修と相續とあり自修とは自ら一心念佛して信心の暗曚と爲る、相續とは師友の心力感傳にて信心喚起せらる、甲の燈燭より乙に傳はる如し、何れにしても人生の大事なること熱誠を要す、釋尊は一向に專ら彌陀を念せよと示し給ひ聖善導は一心專ら彌陀の名號を稱へ念々に捨されと教へ聖法然は誰一向に念佛すべしと勸めなされた彼聖者の教を信じて至心不斷ならば必ず信心の曙光と爲る爲らん、朝夕の拜禮讚稱等は皆心靈を養ふ糧である、內に自

ら信念增進し如來の恩寵に育まれ靈の種は萠發し信心喚起の滿位とはなる。

無稱光（信心開發の位）

已に信心喚起して佛種が萠發す、是よりは恩寵を被むりて信心の花開かんとす、微かに光明を得て從來の我を顧みれば自己の罪惡また無慚の甚だしき今は漸愧に耐へず、業障深重なる我は如來の光明に依て生れ更らざれば浮ぶ瀨なきと思へは、彌慈悲の御親が頼母敷感じらる如來と離れぬ身とならざれば安心できぬ、我本如來の子なれ共煩惱の魔に隔てられて親子の共暮しができぬ、彌業障深重が苦悶を感じ刻苦奮勵は鑛垢を去りて純金を練り出す如くまた例へば寶石琢磨し日光反映する如く佛我に入り我佛に入り神秘の靈感歡喜極なきを覺へて信心の華開く、こゝに於て闇黑の我は光明の人と生れ更る之を開發の位とす、如來に靈感の妙味は言語に稱べることできぬ故に無稱光と名づく。

超日月光（光明體現の位）

信心已に開發し心靈更生したる後は即ち之れ佛子である、此よりは光明中の人として智慧と慈悲との恩寵を被むり聖意を承たる意志として靈的活動を爲すべきである、肉體が太陽の能力に依て活ける如く心靈は如來の光明に由て活く教祖が生涯に洎りて身の行爲口の言語意の思想を以て完全なる道德の鑑を爲せし如く我ら之に倣はざるべからず、如來の聖意を我心にして之を實行に顯はす之れ靈的光明の生活である、我らが靈活動させる如來の靈德を超日月光と名づく之を體現の位とす。

南無の三心

如來は心靈界の太陽として光明徧ぬく照して遺すことなし然るに衆生何なる心意を安てか如來の聖意に相應うべき、若し衆生の安心が如來の聖寵と合せざれば救濟に預かることできぬこゝに於て安心の要おこる、經に十方の衆生よ至心に信樂して我國に生せんと欲して我を念せよ必ず我許に生れんれし生せずば我も正覺を取らず。

是れ如來より衆生に對する聖意である、至心とは至誠心人の心に如來から受けたる佛心と人の子たる煩惱（私欲）と兩面あり私欲は虛僞にて佛心は至誠である佛性の至誠を以て我を信じ我を愛し我國を欲望めよこの心に在ます、故に衆生の汚れたる罪の我が清き我卽ち佛子と生れ更らんと欲せば如來を信じ如來を愛し靈國に生れんとの意を以て如來を念ずべきである之を三心と云ふ略して解せば。

至心に深く信す

信とは如來との關係を認めて疑はぬこと、信に三種あり一に現在の我は汚と惱と闇と罪とにて自己の力にては解脫できぬものと、二に如來の心光は此の我を攝受して佛化し玉ふものと、衆生信水澄む時は佛日の影映る、我らが信心澄ぬれば佛我に入り玉ふ信心の水は一心に念佛する處に沁き出す、念佛とは我心卽ち佛に入り佛心我に來り玉ふ恰も池を穿て水を出す如く念佛すれば如來の心水卽ち湧き出づ、念々に佛を念じて無限の泉源より我に湧き出だす信水常に滿ぬれば、佛日我に在りて永しへに照映す、信に三位あり、一に仰信　知解に洹らず唯一に師友の敎を信じ一向に如來の心光を仰ぎ不思議に感應して救濟の實をう、二に解信　宗敎上の眞理卽ち如來と我との關係を能く理解して信すること

ミオヤ　第二十號　第二卷第一號
大正十一年十二月十日印發行
（毎月一回二十五日發行）
（大正八年八月十八日第三種郵便認可）

三に證信　實修の功果として佛身又光明等を實驗して信ずること、三位の中何にても不動の信を得ればよろしきとす。

至心に如來を愛念す

如來を愛念するは感情の信仰である、宗敎の中心眞髓は感情にあり、如來を全く我有として親密なる關係と爲り熱誠が血に湧き歡喜ぶ涙に溢れ靈的戀念忘る能はざる等は感情の信仰である、如來に對する愛念に三位あり、一に小兒が母を慕ふ如くに愛す小兒は世に母程頼母敷きものはない、我らも如來の外に永遠の頼みとするもの無き故に凡てに超て如來を愛念す、二に異性に對する樣に如來を愛念す、法華に一心に佛を見まく欲しさに戀慕して止まざれば佛は現はれ出て爲に說法し玉ふとの愛念、三入我々入の愛念、如來は我が大我にして我と如來と眞合して不可離的に如來を愛するは眞の我を愛するに外ならぬ、中心眞髓の愛より出づる念佛は全生命に合一することになる。

至心欲生の念

欲生は生きんと欲する念、即ち意志の信仰である一切生物は悉く肉に活きんが爲に全力を用いておる今の欲生心は卽ち無限の光を得て永遠の生命に活きんとの望である、最高等なる理想卽ち彌陀の中に生れ最高等なる人格卽ち佛に成らんとの念である、聖雲慧曰く彼の極樂の受樂無間なるを聞て樂を貪ぼる爲に生を求むるは不可である願くは自ら佛に成らんが爲自から佛に成ることは一切衆生を度はんが爲一切と共に永遠の安寧を得んが爲に如來の國に生を求むるであると恁の如きの望は如來を離れては不可能である故に念々に佛を念じ如來の聖意を我意とし御子の目的を到達すべきが欲生の念である

結勸　上來說來る結歸、南無阿彌陀佛なり、十二光は如來が我らに對する恩寵卽ち子等を靈育する靈能にて南無の三心は我等が如來の心光を受くべき信仰である、能く此眞理を會得した上は唯一向に念佛し如來と常恒に離れず、然る時は是れ光明中の人であろ現在を通じて永遠にまゝ如來と共に在るなり、然れども此肉の有る限りは自然の約束は免れぬ、否實は此身は光明中の人を爲て聖意を現はすべき器械である、彌つとめあげたる後は極樂涅槃界に還りて如來と共に永遺無窮に一切を攝化せん、願くは世の同胞よ同しく如來の子たる實を現はさることにつとめんなむ。

× × × × × ×

誌料　一ケ年前金六拾六錢
編輯兼發行人　岩品誠信
東京京橋區本八丁堀一丁目十五番地
印刷人　秋場熊太郎
東京小石川區水道端二丁目四十四番地
發行所　ミオヤ　のひかり社
振替東京四九三四八番
東京別時會。十一月十一日ヨリ七日間小石川原町一行院
柏崎御納骨法要。十一月三日ヨリ五日迄越後柏崎極樂寺